耳原鍼灸院　8月1日
移転リニューアルオープン

耳原鍼灸院は1970年　耳原病院に東洋医学室が設置され、その後1980年９月に耳原旭ヶ丘鍼灸所として開設、現在まで48年間、皆さまに支えられた歴史ある鍼灸院として存続してきました。

この夏、現在の旭ヶ丘北町から、38年前に初めて鍼灸所として出発した「耳原旭ヶ丘会館」に再び移転することになりました。

受付時間

	月	火	水	木	金	土
午　前 9:00～11:30	●	●	●	●	●	●
午　後 13:30～15:30	●	●	●	—	●	●
15:30～17:00	訪問鍼灸				訪問鍼灸	
夜　間 17:00～19:30	—	●	—	—	—	—

◆休診日／日曜・祝日・年末年始（12/30～1/4）
◆鍼灸施術には事前予約が必要です。はじめての方はお電話にて予約をお願い致します。
☎072-241-7010

異文化コミュニケーションカンファレンス　6月14日開催

こころを癒し支える学問
色彩心理学

講師　宝塚大学看護学部講師　木村千尋さん

いまでこそ病院内も色とりどりの色彩があふれています。しかし従来のイメージは、清潔感と相まって「白」―　今回お招きした木村千尋先生は、病衣や建築も含め、色彩環境が人間の心に与える影響など研究されてこられた先駆者です。

今回は、当院アート・ディレクター虎頭（ことう）加奈さんが、チェロ演奏でさらに彩を添えてくれました。

心理学―といっても、児童心理学／行動心理学／社会心理学／教育心理学とその奥行きも幅も広いなか、最終的にたどりついたのが「色」だった、そうです。

途中「カラー・チェックシート」で参加者が自己分析―　まじめ／しっかりもの／社交的／こだわり／冷静／常識／ひとに頼る／ユーモアのあるなし…点数化し気質の傾向を色彩とともに、シートで確認です。

「色彩は、思考にも大きな影響を及ぼします。そのときどきの気分や気質に合わせて、色彩の特性もとりいれながら彩り豊かな暮らしを送っていただけたら」

（事務局　滝沢　洋子）

虎頭加奈さんのチェロ演奏

参加者の感想

- 色彩を使ったセラピーの内容を詳しく知りたい。
- 持ち物の色にもこだわってみたい。
- チェロの音色の中でのワークショップで、気持ちが軽くなりました。
- 私の性格はピンク・水色と決まり、このまま変えずに生きていきます。

理事会報告

5月度理事会（概要）

5月24日（木）午後6時から理事20名、監事2名の出席で、第9回理事会が、社会医療法人同仁会本部3階会議室で開催されました。

理事長開会挨拶のあと、専務理事より会務報告、友の会活動、経営結果では経常利益で予算を超える結果となったことが報告され、出席理事全員が確認しました。また、3000万署名活動の到達や活動報告を行いました。

〈主な内容〉
①拡大常任理事会等の会務報告
②健康友の会みみはら代表世話人会議報告
③4月度経営結果報告
④協議・確認事項
・定例評議員会の議案について
・耳原総合病院総合入院体制加算の選定療養費徴収金額について
・人事に関する案件
他

耳原実費診療所創立60周年記念誌

60年のあゆみ
いのち輝け未来へ

その6

第3章
要求に応え多面的に発展、規模・内容を充実
1972年～1981年

（前号のつづき）

公害や高齢化など社会問題の深刻化、政治の革新、診療報酬引き上げなど

1970年代の耳原総合病院をはじめ同仁会内の病院・診療所の機能拡大・拡充の背景には、60年代の日本の高度経済成長がもたらした「負の側面」―公害の深刻化（堺では臨海部の工場地帯から発生する有毒ガスによる喘息）や、低い医療・社会保障制度など社会問題と改善を求める国民世論・運動の盛り上がりがありました。

岩手県沢内村が1961年に全国に先駆けて行った老人医療費の無料化は、東京都・美濃部革新都政での実施（69年）、大阪府・黒田革新府政での実施（72年）など全国の都道府県市町村に広がり、ついに1973年、国による老人医療費無料化が実現。また、健康保険家族の負担割合の引き下げ（5割から3割へ）や高額療養費制度の発足もこの年に行われるなど、1973年は「福祉元年」と呼ばれるように医療・社会保障の前進が勝ち取られました。

また、70年代は医療機関に支払われる診療報酬も一定の改善が図られました。報酬の改定率（引き上げ率）は毎回10％台で、1970年と78年との比較では1・8倍となり、その後のひと桁前半（2～3％）、さらには2000年代のマイナス改定の時代からは想像できない高い報酬の改定が行われていました。

総合病院の新築

第一次5ヶ年計画の中心的事業であった耳原総合病院の建て替えは、当時の経済成長と物価上昇による建設費用の高騰などの財政面はもとより、土地をめぐる困難に直面しました。当時の耳原総合病院は、病院開設時には所有していた土地を堺市に寄付し、その土地を市から無期限・無償で借り受けて使用していました。建て替えにあたり、その土地の返還を堺市に求めたところ、いったんは了承されながら、後日撤回される事態に直面したのです。

この事態に、耳原の職員そして地域の民主勢力が結束して立ち上がりました。病院幹部と堺市との交渉、さらには病院の一般職員や民主団体の人々による市長室前での座り込み行動も展開されました。

こうした地域からの強い後押しを受けて、1973年に建て替え工事の着工を勝ち取り、翌1974（昭和49）年6月、地上6階・地下1階建ての「新館」（ベッド数196床）が協和町に姿を現しました。

（つづく）

堺市の耳原病院新築妨害問題で共産党国会議員団が調査のため来庁（1977年４月）

※発行当時の原文のまま掲載しています。